

会員近況



弘前大学
人文学部経済学科 黒須 誠治

大学では生産管理論を講じていますが、最近、知的生産に関することがブームだそうで、小生も知的生産の管理と称して、大学の研究室を勉強しやすいよう工夫しています。まず手をつけたのが、“長く机に向かっていられるシステム”の設計です。椅子や机の高さを人間工学的に調整し、採光を考え、BGMを流すようにしました。次に“楽に読めるシステム”です。市販されている電話台と書見台を組み合わせて、正しい姿勢で本を読めるように、また時には寝そべて読みたいこともあるので、このまま横になることのできるオットマンを作りました。そして現在仕掛り中なのが、“楽に書けるシステム”です。書き物台としては、キャスターつきで台の高さと角度が自由に変えられる小さなテーブルが具合よく、結局机は不要になる可能性が大です。

これらのシステムは、使い勝手が良く気に入っているのですが、1歩誤ると、“長く楽に居眠りできるシステム”に早変わりしてしまいます。その対策も考えなければなりません。また、もっとOR的なアプローチもしくなくてはと思っています。

日本ユニバック
技術情報管理部 太田 宗洋

最近の私の仕事はコンピュータに関する本造りである。原稿を受け取ってから体裁を整え、印刷物として世に出す仕事である。仕事の関係上いろんな原稿にお目にかかる。要領よく短い文章でまとめ上げている人がいる反面、どことなくしまりのない文章を書く人、言葉の選択が不適切な人などさまざまである。このような原稿を見るにつけても、より美しい正確な日本語を用いたいという気持ちが日増しに強くなってきている。

さて、よりいい文章を書くためには常日頃からの基本動作が大切である。心とともに文章も磨かなければならない。そのためには、31文字の短歌を常日頃から作る訓練をすることが、私にとって最も有効な方法だと思う。短歌を作る過程で、同じ文字数でより適切な言葉はない

か、声に出してみても心の調べとびったり合っているかどうかなど試してみたりする。このように短歌でも文章でも、常によりよく洗練・総合することが大切である。

安達技術士事務所
所長 安達 真夫

昭和48年にコンサルタント・エンジニアとして独立してから7年になります。その間、主として中小企業の経営戦略の指導という仕事を通して、いくつかの企業とおつき合いいただいておりますが、このような実践面での経営問題は、きわめて複雑多岐にわたっています。しかし、低成長時代に入って特に感じることは、各企業が皆申し合わせたように従来ではみられないほどのキメの細かさで、利益確保を指向し始めたことです。これは、売上収益が伸び悩んでいる一般の企業からすれば当然のことでしょうが、他方、これらの問題への対応手段として、最適化計画を中心とするOR手法の活用が次第にひろげてきたことは、まことによろこばしい限りです。しかし、これらOR手法を活用すべき実践の場では、たとえば、部分最適化現象などのように、手法に走って、その本質を見誤るような問題が多発していることはまことに残念なことです。ORの理論や手法を実践の場に適用して効果を上げることを任務と心得ている私どもとしては、まず第1に問題の本質を見誤らないように心がけてゆきたいものと願っています。

ブリヂストンタイヤ
生産管理部 新井 康弘

昨年までコンピュータを使用して、予測にたずさわっておりました。最初は時系列分析から手がけ重回帰分析、各種モデル作成を行ないました。もちろん製造業のこと、初歩的なものでした。化工品部門はタイヤ以外の製品（ベルト、ホース、水槽、…）を生産しています。したがって予測作業もいくつかの製品に関して行ないました。手法、背景、目的もまちまちです。その間技術的ミス、サラリーマンとしてのミス等々いろいろありました。ここで失敗例の1つを紹介させていただきます。

製品は水槽（ビルの屋上、地下に設置する）で法規制により従来のセメント製からFRP、鉄製に今後かわりつつあるものです。わが社としては新製品であり、過去の実績データなどむろんありません。そこでビル（マンション、病院、事務所、…）を予測し、それから逆算し

て水槽市場を推定しました。結果はかなりのオーバーエスティメイト。逆算するに当り先発メーカーS社の販売カタログ(マンション1000m²でエトン…)を参考にしましたし、新聞紙上では1000億円市場、当然社内での期待も大きかったです。これはほんの一例で、書物等のようにスマートにはいかず、実際にはもっともっとどろくさいことをやってきました。

広島工業大学 土木工学科 二神 種弘

ORとの出会いは、12年前に神戸大学での修論で下水道システムの最適化にDPを用いたのが始まりです。その後、3年間、東京の八千代エンジニアリング社で、土木構造物解析のための有限要素法のプログラム開発や、LPを用いた最適土量運搬計画法の開発などの仕事に従事しました。

会社退職後、京都大学博士課程(衛生工学専攻)に進学し、環境に関する哲学的研究を目ざして、文学部の授業を聴講したり、大文字山100回目標で99回登ったりしながら、優雅な(怠惰な?)生活を2年近くしました。しかし、博士課程の残り1年間は、哲学的研究を途中断念して、有限要素法とLPを併用した微分方程式系の最適制御のための「有限要素・線形計画法」の開発応用のため、東京大学大型計算センターに通いつめねばなりませんでした。

5年前から、広島市外の五日市町にある広島工業大学に勤務し、仕事のかたわら、毎朝、瀬戸の景色の美しい極楽寺山の麓で自然農法を楽しみながら仏教や老子の教えをかじっております。これらの教えは、悠久なる自然や歴史、およびそれらの中での人間のあり方の非ORのORをしばしば感じさせてくれるようです。

行政管理庁 行政管理局統計主幹 工藤 弘安

OR学会は創立当初からの会員ですが、30年余り官庁統計をつくる側の仕事をしてきましたので、統計を使う側のORの仕事は、ほとんど無縁に打過ぎました。最近これまでの経験をもとに、“統計学”と題する1巻を、やっとまとめることができたような次第です。

官庁統計をつくる側からみますと、統計が各方面で活発に利用されていることは、喜ばしいことに違いないのですが、反面、統計があまりにも無造作に使われている

のではないかと、という心配もつきないのです。官庁統計には、必ずその基礎に、概念や定義あるいは分類などの約束があり、制度上の枠組みもあります。統計が数字で表現されているからといって、それらの背景を無視して、いたずらに数字の操作に深入りすることは、大変危険な橋を渡ることになりかねません。危険な橋渡りは未だに防がなければなりません。そのためには、統計を使う側の人々に、時には統計を作る側にも立っていただきたいというのが、昨今の念願です。

運輸省港湾技術研究所 システム研究室長 奥山 育英

土木学会、航海学会、情報処理学会にも所属しているが、何もせずに会費を納めているだけの学会はOR学会だけである。大学時代の専攻が数学だったことからOR学会こそ一番近いと思われるが、もっぱら、土木学会の計画学部門、航海学会の海上交通工学部会が学会関係の発表の場、活動の場となっている。

ORに関しては、手法を純粹に研究することは行政の付属機関にはなじまないし、だからといって意思決定者と直結して問題を解決するわけなし、8月号で国沢先生が述べられている「二極化」ならぬ中2階のORともいべき場所に位置していると思われる。その内容は行政の直面する、もしくはしそうな諸問題をモデル化して科学的解答を与えるということである。その解答が行政当局の意思決定に直結せずに、1つの判断材料として利用されるあたりが、現時点においては研究所で行なうORの限界であろう。

業務は計画全般が対象であることから多岐にわたるが、最近における主要なものとして、高能率港湾への模索、航路体系の整備、関西空港建設にともなう海上交通への影響、スエズ運河への計画面での技術協力等があげられよう。

計報 村上 敏氏(東京電機大学助教授)

昭和55年11月25日 心臓発作のため逝去されました。享年41才。謹しんでお悔み申し上げます。

羽鳥 司氏(防衛大学校教授)

昭和55年10月12日 脳溢血のため逝去されました。享年58才。謹しんでお悔み申し上げます。

船田昌之氏(中小企業金融公庫技術嘱託)

昭和55年9月15日 心筋梗塞のため逝去されました。享年69才。謹しんでお悔み申し上げます。